

藤原京右京九条二・三坊、瀬田遺跡の調査（飛鳥藤原第 187 次調査） 記者発表資料

2016 年 5 月 12 日

独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所 都城発掘調査部

発掘調査地 : 奈良県橿原市城殿町
発掘調査期間 : 2015 年 11 月 25 日～継続中
発掘調査面積 : 2019 m²

現地見学会を 5 月 15 日（日）10:30～15:00 におこないます（少雨決行）。

駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください。

（入口は北側のみでポリテクセンター敷地奥には入れません。）

概 要

藤原京の西二坊大路や坪内道路、坪内に計画的に配置された大型掘立柱建物群を検出し、藤原京の宅地利用に関する新たな知見を得た。また、弥生時代終末期の周溝墓群を確認し、陸橋をもつ大型円形周溝墓の存在を明らかにした。その結果、弥生時代墳丘墓の発展過程解明につながる成果があがった。

1. 調査の経緯

本調査は、奈良県橿原市城殿町に所在するポリテクセンター奈良（独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構奈良支部 奈良職業能力開発促進センター。以下センターと表記）の本館建て替えにともなう調査である。調査地は、飛鳥川左岸の緩やかな傾斜地に位置し、本薬師寺南方の藤原京右京九条三坊東北坪とその東の九条二坊西北坪、西二坊大路にあたるとともに、弥生時代の遺物散布地、瀬田遺跡の一部でもある。

センター敷地内では、1987 年の第 54-18 次調査北区で西二坊大路の東側溝を、1990 年の第 63-3 次調査で西側溝をそれぞれ検出している。2015 年の第 185-7 次調査では、センター敷地外の北約 200m の地点においても西二坊大路の両側溝を確認しており、本調査区内でも西二坊大路が検出されることが期待された。また、2007 年に奈良県立橿原考古学研究所がセンター敷地内でおこなった調査では、弥生時代終末期の土器集積土坑や縄文時代後期の遺物包含層が広がることが確認されている。

2. 調査の成果

検出遺構は、大きく藤原京期と弥生時代終末期の 2 時期にわけられる。

① 藤原京期の遺構

(1) 条坊道路

道路1 (西二坊大路) 調査区東側で検出した。周辺の調査成果を勘案すると、南北溝が東側溝とみられる。南北溝は最大で幅 1.0m、深さ 0.3m。調査区南側では攪乱のため残存していなかった。西側溝は削平のため検出できなかったが、後述する塀1および塀2が九条三坊東北坪の東辺を区画する塀とみられ、周辺での調査成果を合わせて道路幅は 16m 前後と推定される。

(2) 右京九条三坊東北坪の遺構

建物1 調査区の西南部で検出した南北棟の大型掘立柱建物。桁行6間、梁行2間(15.6×5.4m)。柱間寸法は桁行の中央4間が2.4m(8尺)、両端間が3.0m(10尺)、梁行は2.7m(9尺)。柱穴は一辺0.7~1.2mの隅丸方形で、深さは0.5m。建物はほぼ正方位に近いが、北でわずかに西に振れる。複数の柱穴で、掘方底部付近に拳大の礫が詰まっているのが確認される。建物周辺では足場穴とみられる小柱穴を検出した。

建物2 調査区の西北部で検出した東西棟の大型掘立柱建物。桁行6間、梁行2間以上(13.6×4.8m以上)。柱間寸法は桁行およそ2.1m(7尺)、梁行2.4m(8尺)。柱穴は一辺0.8~1.1mの隅丸方形で、深さは0.6~0.7m。建物1同様、北でわずかに西に振れる。建物周辺では足場穴とみられる小柱穴を検出した。

建物3 調査区の西北隅で大型柱穴2基を検出した。西側に延びる東西棟掘立柱建物とみられる。柱間寸法は2.4m(8尺)である。柱穴は一辺0.9~1.0mの隅丸方形。建物3は、建物2の西妻から3.6m(12尺)西、建物1の北妻から15.3m(51尺)北に位置する。建物3は、建物2と柱筋を揃え、東妻柱列は建物1の棟通りの延長線上に位置している。また建物2は、西妻の筋が建物1の東側柱列とほぼ揃い、これらの大型掘立柱建物は規則的な配置がうかがえる。

建物4 調査区西北隅で検出した東西棟掘立柱建物。桁行1間以上、梁行2間(1.8以上×4.1m)。柱間寸法は、桁行1.8m(6尺)、梁行2.1m(7尺)。柱穴は一辺0.8~1.0mの隅丸方形で、深さは0.6~0.8m。建物3との先後関係は不明。

建物5 調査区中央部北半で検出した東西棟掘立柱建物。桁行3間、梁行2間(5.4×3.6m)。柱間寸法は桁行・梁行ともに1.8m(6尺等間)。柱穴は一辺0.5~0.8mの隅丸方形、深さ0.3~0.4m。攪乱のため南東隅柱は確認できない。

建物6 調査区中央北半で検出した南北棟掘立柱建物。桁行3間、梁行2間(6.3×4.2m)。柱間寸法は桁行・梁行ともに2.1m(7尺等間)。柱穴は一辺0.5~0.7mの隅丸方形、深さ0.2~0.4m。攪乱のため北東隅柱と東西の側柱2本は確認できない。

建物7 調査区中央部南半で検出した南北棟掘立柱建物。桁行3間、梁行2間(6.6×3.6m)。柱間寸法は桁行2.1m(7尺)だが中央間のみ2.4m(8尺)、梁行1.8m(6尺)。柱穴は一辺0.4~0.7mの隅丸方形、深さ0.2m。攪乱のため北妻柱は確認できない。

塀1 調査区中央部で検出した南北塀。12間分(25.1m)を検出した。柱間寸法は1.8~2.4m(6~8尺)。柱穴は一辺0.4~0.7m、上部が大きく削平されており、残存する深さは0.1~0.2mと浅い。西二坊大路に面し、九条三坊東北坪の東辺を画する区画塀と考えられる。

塀2 調査区中央部で検出した、塀1と重複する南北塀。8間分(計18.2m)を検出した。柱間寸法は2.4m(8尺)。柱穴は一辺0.4~0.7mで、深さは0.1~0.3mと浅く、塀1より相対的に小さいものが多い。柱穴の重複関係から塀1より新しく、塀1を同じ位置で建てかえたもの。南側3間分と北側5間分との間で柱が途切れており、この場所に入出口が開いていた可能性がある。

(3) 右京九条二坊西北坪の遺構

建物8 調査区東北隅で検出した東西棟掘立柱建物。桁行3間以上、梁行2間以上(5.4以上×3.6m以上)。柱間寸法は、桁行・梁行ともに1.8m(6尺等間)。柱穴は一辺0.5~0.6mの隅丸方形で、深さ0.3~0.6m。

道路2 調査区東側で検出した、東西溝1・2を両側溝とする幅2.7mの道路。北の東西溝1は幅0.5m、深さ0.2m、南の東西溝2は幅0.4m、深さ0.1mである。両側溝は西で南北溝(西二坊大路東側溝)に接続し、途切れる。坪内をほぼ南北に二分する位置にある。

溝状遺構 調査区南東部で検出した溝状の遺構。幅は最大で2.1m、深さ0.7m。埋土中に7世紀末頃の土器を含むほか、多くの木片を含む。詳しい性格は不明。

東西溝3 調査区南東部で検出した東西溝。幅は最大で0.5m、深さ0.4m。埋土中に7世紀末頃の土器を含む。

② 弥生時代終末期の遺構

周溝墓1 調査区中央部で検出した円形周溝墓。墳丘は後世の削平により失われており、周溝のみを検出した。周溝は、現状で幅約6m、深さ0.5m。南側で一部周溝が途切れる部分の確認でき、墳丘に接続する陸橋と考えられる。主軸は北でやや東に振れる。墳丘の直径は約19m、周溝を含めた径は東西31.0m、陸橋部分の残存長は約7m。陸橋の平面形および幅は、周溝の一部が削平されているためはっきりしないが、墳丘側から周溝外側に向かって開き、狭いところで幅約3m、広いところで幅約6mに復元される。

周溝墓2 調査区東北隅で検出した方形周溝墓。墳丘は削平されており、周溝の一部のみを検出した。周溝の幅は最大で3.4m、深さは0.2m。周溝は墳丘の周囲を方形にめぐるとみられ、墳丘は一辺5.4m以上となる。

周溝墓3 調査区北東部で検出した方形周溝墓。墳丘は失われており、周溝の一部のみを検出した。周溝の幅は最大で1.2m、深さ0.4m。周溝墓2と同様、周溝は方形と考えられ、墳丘は一辺2.7m以上である。

土坑1 調査区中央部のやや西側で検出した不整形の土坑。径2.1~2.7m、深さ0.9m。

周溝墓1の墳丘があったと考えられる位置にある。埋土中から、ミニチュア土器数点を含む弥生土器のほか、燃えさしが出土した。

土坑2 調査区中央部で検出した楕円形の土坑。最大径1.4m、深さ0.6m。土坑1同様、周溝墓1の墳丘があったと考えられる位置にある。埋土中から弥生土器の小片が出土した。

③ その他の時期の遺構

建物9 調査区北東部で検出した掘立柱建物。桁行3間以上、梁行1間(5.4以上×3.0m)を検出した。柱間寸法は桁行1.8m、梁行3.0m。柱穴は一辺0.5～0.8mの隅丸方形で、深さは0.4m。建物は北で西に大きく振れる。東西溝1より古く、周溝墓2より新しい。藤原京期以前、弥生時代終末期以後の建物である。

建物10 調査区北東部で検出した南北棟掘立柱建物。桁行2間、梁行2間(4.8×4.2m)。柱間寸法は桁行2.4m、梁行2.1m。柱穴は一辺0.4～0.6mの隅丸方形で、深さは0.2～0.3m。北隅柱と南妻柱は南北溝に壊されている。建物は北で西に大きく振れる。南北溝より古く、周溝墓3より新しい。藤原京期以前、弥生時代終末期以後の建物である。

井戸 調査区中央部で検出した不整円形の井戸。径0.8m。0.3mの深さで井戸枠とみられる曲物を検出した。

斜行溝 調査区中央部北半で検出した斜行溝。幅は最大で1.9m、深さ0.4m。周溝墓1との重複関係から、弥生時代終末期以前のもの。

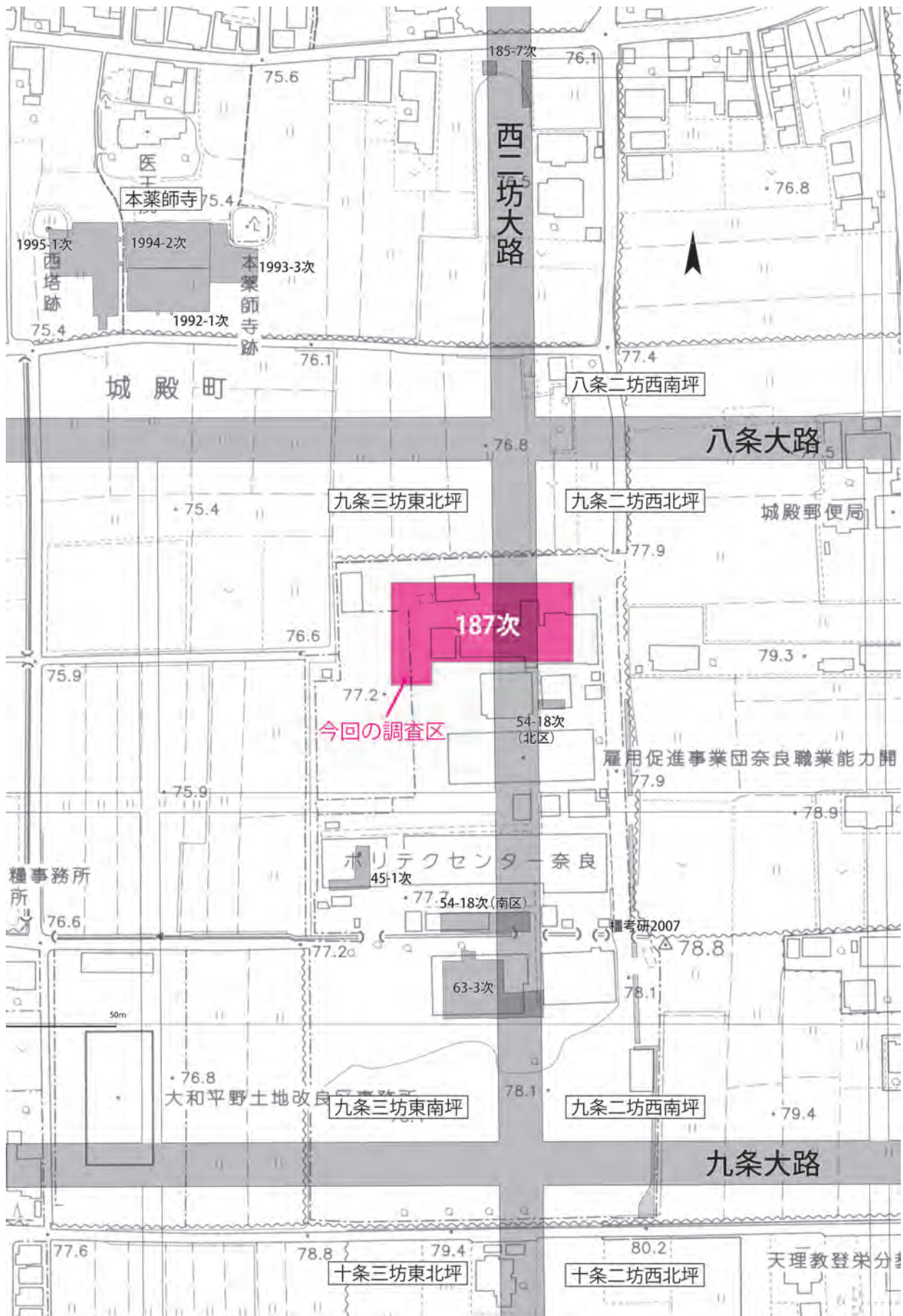
3. 出土遺物

多数の土器のほか、少量の瓦などが出土した。土器は、弥生時代終末期に属するものが主体で、周溝墓から出土したものが多い。他に、縄文土器や7世紀の土師器・須恵器も出土している。また調査区西部で、弥生時代の石包丁が出土した。

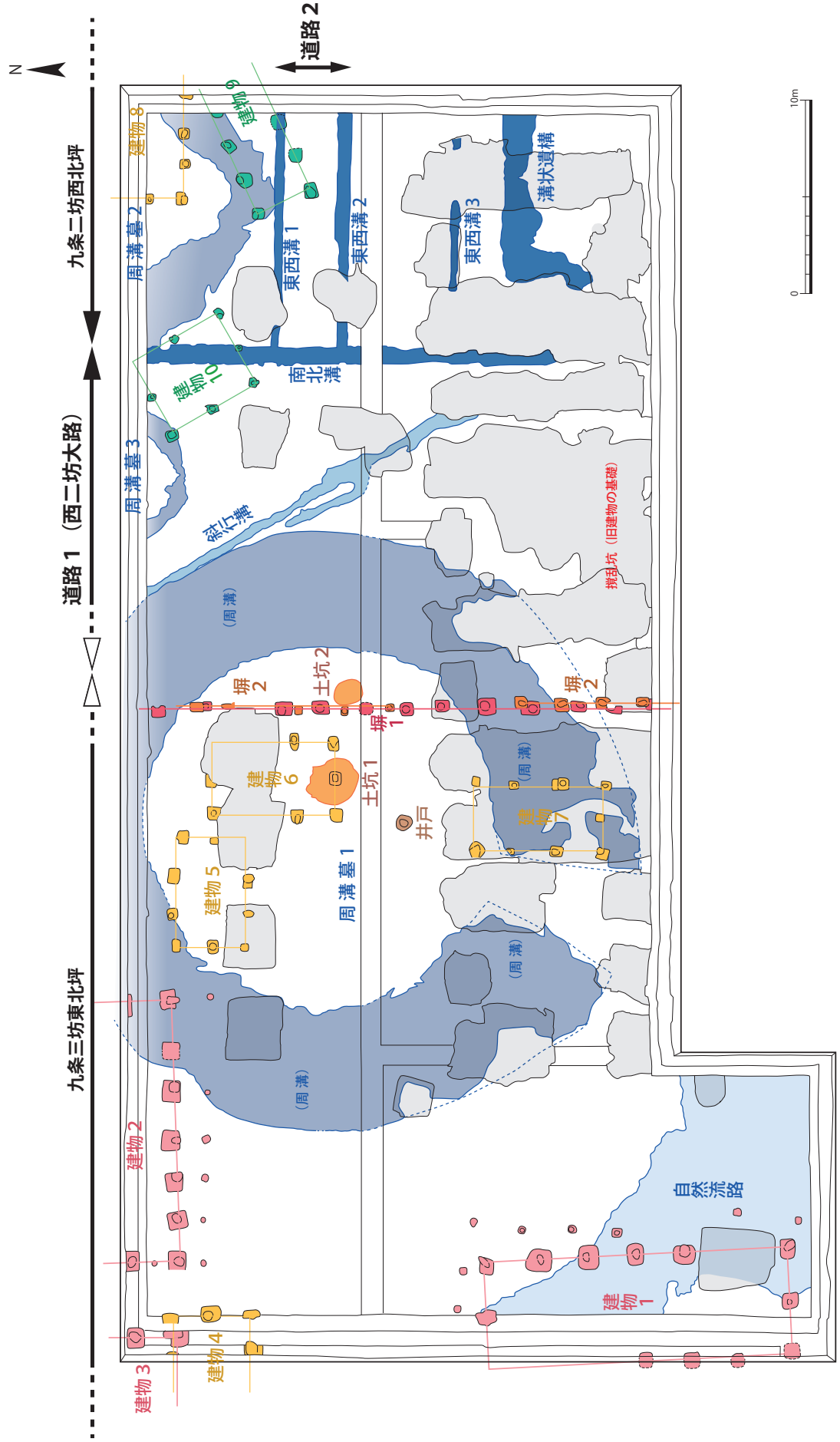
4. まとめ

藤原京期 条坊道路では、西二坊大路東側溝とみられる南北溝を検出したことで、西二坊大路の位置を明らかにすることができた。九条三坊東北坪では、同時期とみられる大型掘立柱建物3棟を検出した。これらは坪の東半に計画的に配置されており、この地に一町(以上)を占める施設が存在していた可能性を示唆している。一方で、九条二坊西北坪では坪内道路とみられる道路2を検出し、坪内を分割して利用していたことが確認された。隣接する坪で利用実態が異なることが明らかとなり、藤原京の宅地の様相がうかがえる新たな事例を加えた。

弥生時代終末期 大型の円形周溝墓とそのすぐ東に隣接して営まれた数基の方形周溝墓を検出した。とりわけ円形周溝墓1は南側に陸橋が接続するもので、同時期の大和地域では最大級の規模である。弥生時代墳丘墓の発展過程を考える上で、貴重な資料である。



飛鳥藤原第 187 次調査区的位置 (S=1/2000)



飛鳥藤原第187次遺構平面図